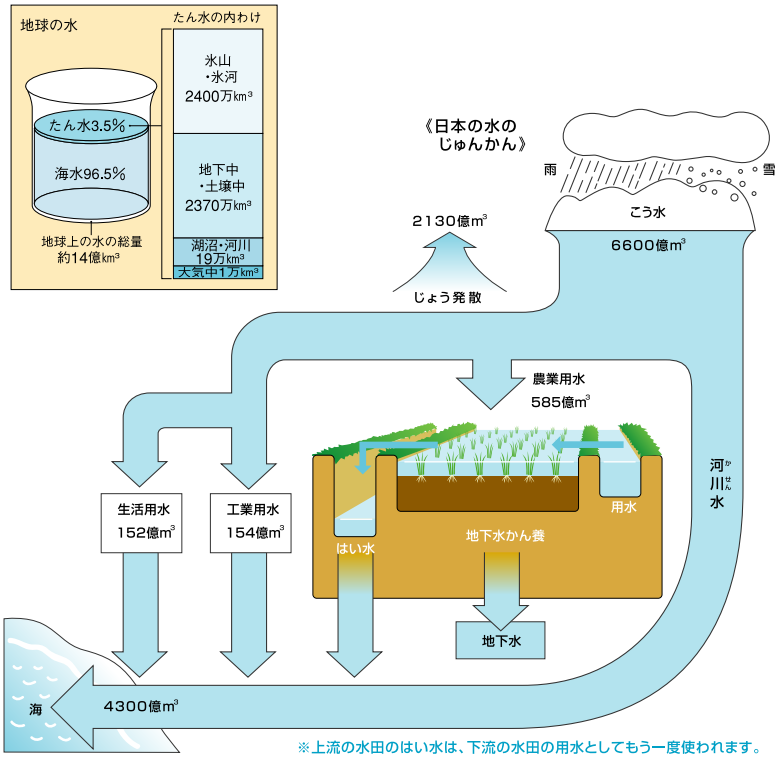
水をじゅんかんさせる

リサイクルされる農業用水

地球は「水の星」とよばれています。雨や雪として地上におりた水は、川や地下水になって海に流れ、やがてじょう発して雲になります。人が利用できる水は、地上から海の間のほんの一部にすぎないのです。

日本の１年間のこう水量は約1800㎜と多いけれど、季節によるかたよりも大きいのです。それに、島国で急な地形のため、雨は短時間で海に流れてしまいます。そのうえ人口も多いので、ひとりあたりの水は必ずしも多くないのです。

だからこそ、日本の農業は水を大切に使ってきました。農業用水は、ふった雨を有効（ゆうこう）に使って、不足している分だけを取りこんでいます。そして、取りこんだ水のうちのおよそ2割（わり）を稲（いね）の成長に使い、残りは川へもどしたり、地下水になっているのです。おまけに、川や地下水にもどる水は、水田をじゅんかんしていくうちに、酸素（さんそ）がいっぱいのきれいな水になっています。ですから、下流では、その水を安心して使うことができるのです。水田は、まるで水のリサイクルセンターですね。



※上流の水田のはい水は、下流の水田の用水としてもう一度使われます。